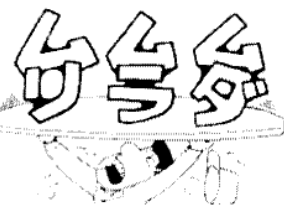


『再び生きるために』を読んで

豊住 正治

私は、高次脳機能障害で、身体障害の方の悩み・苦しみがわかるようでわからないところがあります。しかし、発病前、それなりに村社会（企業・組織）の中で、存在価値を認められていた人間が、その存在を否定される衝撃はよく理解できます。そして、それに伴う経済的問題、家庭内変化等々。気力を失い、発病前の状態にばかり想いが行く日々。

「村社会（企業・組織）」は「何ができる」ということよりも「何が出来ないか」が価値判断（1, 0）になっているということが、自分が障害者になって気づいた次第です。



私は現在 56 歳、「仕事人間」としても「人間」としても峠は過ぎています。今までは「仕事人間」として必要のないことは省くような人生を送ってきたような気がしてなりません。

これからは、良い意味での「無駄」に目を向け、人間として精神的に豊かで魅力ある人間になりたいと思う心境です。（そうしないと家内から三行半を突きつけられるかもしれません。オオ コワイ）

最後に、自分に「何ができるか」を考えて生きていたいと思います。

細田さん 有難うございました。

『病いの経験と主体の「変容」－再び生きるために－』は細田満美子氏の博士論文。東京大学博士論文ライブラリーで閲覧可能（請求番号 2005・V:5）